

論文審査の結果の要旨

報告番号	<input checked="" type="radio"/> 甲 <input type="radio"/> 乙 第 452 号 <input type="radio"/> 乙 <input type="radio"/> 乙 <input type="radio"/> 口 <input type="radio"/> 修	氏名	檜原 司
審査委員	主 査 松香 芳三 副 査 吉村 弘 副 査 河野 文昭		

題 目

Assessment of potential clinical cascade between oral hypofunction and physical frailty: Covariance structure analysis in a cross-sectional study

(口腔機能低下と身体的フレイルの臨床的関連：共分散構造分析を用いた横断研究)

要 旨

今日、日本では高齢者人口の増加は顕著であり、高齢化率は世界で最も高いものとなっている。高齢者の健康対策、重症化予防の観点からフレイル予防が注目されている。また、歯科からはオーラルフレイル、口腔機能低下症という概念が提案されている。身体的フレイルと口腔口腔機能低下の相互関係、関連性の強さについては明らかではない。本研究では、仮説を「口腔機能の因子が身体的フレイルに与える影響は、身体的フレイルの因子の相互関係における影響よりも大きく、その影響は男女において異なる」とし、身体的フレイルと口腔機能低下の関係を明らかにすることを目的とした。

1 歯科医院にメンテナンスで来院した高齢者272人(男性101名、女性171名、平均年齢75.1±7.5歳)を対象に、口腔機能低下の項目として、第一大臼歯部での最大咬合力(Maximum occlusal force、以下MOF)および口腔湿潤度(Oral dryness、以下OD)を、身体的フレイルの項目として握力(Grip strength、以下GS)および歩行速度(Walking speed、以下WS)を測定した。4つの測定項目の相互関係について共分散構造分析を用いて解析した。男性では、MOFからWSおよびGSへ、WSからGSへの3つの有意なパス係数が確認され、 $p<0.01$ を示したのはMOFからWSおよびWSからGSへのパス係数であった。女性では、男性のモデルと同様に、MOFからWSおよびGSへ、WSからGSへの3つの有意なパス係数が確認され、 $p<0.01$ を示したのはMOFからWSおよびMOFからGSへのパス係数であった。男女ともにODからGS、WSへの有意なパス係数は確認されなかった。また男性、女性ともにモデルの適合度は良好な値を示した。

設定した仮説は立証され、特に女性において、口腔機能低下、とくにMOFが身体的フレイルを評価するために重要であることが示唆された。

以上より、本研究は歯科医学の発展に寄与する研究内容であり、申請者は当該分野における学識と研究能力を有していると評価し、博士(歯学)の学位の授与に値すると判断するものである。